

自然保護から自然奪還へ

明 峯 哲 夫

問題としての現実

地方の中心都市などでは、ビル工事、地下鉄工事、道路建設工事などが昼夜を分かたず進行し、新たな宅地造成はその周辺部へと拡張していきつつある。また農村部においては、水田地帯や畑作地帯の多くが大きな工場地帯へと姿を変えていった。そして山間のハイキング地では、かつてのひっそりとした山道が、大きな自動車道路により各所で寸断されていった。このような現実に出くわしたときなど、たしかに現在、日本の国土が刻一刻とある方向へ向かって再編成されつつあることを感ずる。

こうした国土の再編は、つねに「公共の福祉」とか「社会の進歩」とか、また「生産性の向上」とかいう大義名分に飾られている。「地域開発」の名のもとに「大企業」は誘致され、「観光開発・流通の合理化」と称して「道路」や「鉄道」ができる。そして「空は今や大型時代」とばかりに「大空港」の建設は図られ、「電力不足の解消」

として「発電所」が建設されていく。また、この種の「進歩」は必ず土地を奪ったり、「公害」を生じさせたりすることによって、人々になんらかの被害を与えている。しかし、被害をこうむった人々が「進歩」に異議を申し立てると、たいてい社会の「異端者」として排除されていく。いわく「大多数の幸福のためならば、少数の犠牲はやむを得ぬ。それが民主主義だ」と。

そしてさらに、国民のほとんどがこのような説明に納得し、漫然とこの種の「進歩」を進歩として認める。そして場合によっては、被害者に対し少しばかりの「同情」を寄せることがあっても、多くの場合、彼らの「エゴイズム」を非難したりする。これが現実のすべてだ。

「社会の進歩」とは何か

このような現実に対し、まず問題にしなければならぬのは、ここで大義名分とし



て語られている「社会」とか「公共」とか、そして「福祉」とか「進歩」とかいわれるものが、

ラタリこそがじつはいま、われわれが問題にしている人公害・自然破壊の原因の本質を隠蔽し、その激化を許している根源なのである。

自然破壊を仕組む資本と国家

一切その実体を検証されることなしに自明のこととして語られていることだ。しかしながらよくよく考えてみると、「社会」とか「公共」とかいうのがけして国民全体を指すのではなく、実体としては人特定の受益者Vのみを指すことであつたり、また、「進歩」ということがじつは人特定の階層による、より一層の利益の独占Vでしかなかつたりする。

実質としては一握りの人間にしか利益をもたらさない事柄をまったく逆に、「少数を犠牲にしても大多数の利益になる」といってくるものであるのがこの社会の現実であり、このことが問題なのだ。このカ

ここではっきりとさせておこう。上記の利益を独占する受益者とはほかでもない人プルジョワVであり、カラクリとはまさに人国家Vそのものであり、そしてそのカラクリにより不断に幻想を持たされ、実質としてプルジョワVに収奪されていくのが、人大多数の国民人Vであるということだ。

本来、人自然Vは人類の普遍的な共有財産であるべきものであつた。しかし、現実の資本制社会においては人自然Vは一握りのプルジョワVの私物となり、彼らの利益のためのみに利用（収奪）されてきた。利潤追求を至上目的とする資本制的生産により、自然が飽くことのない収奪にまかさ

れてきた結果が、今日の公害・自然破壊なのだ。前に述べた種々の「国土再編」などは、より一層の高度成長を画する日本独占資本が、日本列島をより能率的、合理的に収奪していくものとしての「国土の帝國主義的再編」にはかならない（たとえば昭和四十四年に決定された「新全総」などはその具体的あらわれだ）。

このような現在の日本独占資本が単に日本国内だけではなく、東南アジアをもその収奪の対象領域としようとしているのは必然的である。日本商社による森林乱伐により、現地の自然破壊が深刻化しているという事実をとっても、われわれにそれが現実化していることを教えている。このように現在語られている「社会の進歩」とは、資本のより一層の経済合理性の追求の反映でしかなく、それは「自然収奪」を前提にしている限り、深刻な公害・自然破壊の激化を全国的いや全地球的規模で生み出さざるを得ない。

一方「国家」とは、資本の自然収奪による利益の独占を「公共の福祉・社会の進歩」と言いくるめる壮大な虚構であった。現在の民主主義においては、民主的手続きをより合理化していくことによって、人間の幸福が得られると考えてきた。そして問題解決の手段として「価値観」が介入すること

をタブーとした。そのことよって、あらゆる価値観に対し公正中立を保てること考えてきたからだ。しかし現実には、この「価値観」を問わず手続きだけに墮した民主主義は、「何のために？」とつねに「根源」に立ち戻って考える習慣を人々から失わせ、さらに一方では、あたかも普遍的価値観であるという幻想を与える攻勢に対しては、ほとんど有効な歯止めとはならなかった。

その結果、「現代の物質文明こそが社会の進歩をもたらし、人類を永遠の繁栄に導く普遍的、絶対的な文明である」という価値観が、ほとんどなんの抵抗も受けずに人々の間に浸透していった。

物質文明と現代の価値観

たしかに、この価値観を生み出すだけのものを物質文明は持っていた。すなわち、現代の物質文明は飛躍的に生産力を増大させ、物質的豊かさ μ を人々の多くにもたらした。この「恩恵」により、人々は物質文明に対する「信頼感」をいただき、それが物質文明の自己展開を一層容易にし、さらにそれにつれ、人々の信頼感はやがて「絶対視」になり、「物質的豊かさ μ 人間の幸福」という現在の価値観が支配的となった。

しかしながら、現代の物質文明とは歴史上の一断面としての資本制社会において、一握りのブルジョワジーの私的動機により展開される、文明の一つのパターンにすぎない。『われわれの頭上に巨大な物質文明をぶらさげているのは資本の利益という唯一の糸であり、これは資本にそうする必要ができたときにはなんのためらいもなく切つて落とされるものではない（北大工学部・斗う集団パンフ）』のである。物質文明がもたらしたものは、ただ単に人間の「物欲」を満足させるものでしかなかった。

たしかにある程度、物質的に豊かであることは人間にとって必要だ。しかしそれは人間の幸福にとつての必要条件にはなり得ても十分条件にはなり得ない。

さらに現実には、そうした「物欲」に酔いしれていくことですら、資本にとつての利益 ν という基本原理が存在する限り、人々は極めて被抑圧的、非人間的状態を前提にしなくてはならなかった。すなわちそれは、合理化された労働システムに部品として組み込まれて労働のよるこびを奪われていったことや、公害や自然破壊に身を任せて、自らの生存さえも脅やかされていくという富をかえりして、自らの人間性を資本に切り売りしていったといえる。

それにもかかわらず現在、ほとんどすべての人々がブルジョワジー、労働者を問わず同じ「価値観」を共有している。すなわち価値観に關しては現実には「階級対立」は存在していない。とすれば、われわれは自らの首をしめようとしている殺人者に対して、自ら手を貸していることにならないか。われわれ自身が既成の価値観にとらわれ、物質文明のもたらす「繁栄」を無前提に享受している限り、じつはブルジョワジーによる公害発生・自然破壊の共犯者ともなる。

現在、自然破壊が必ずしも全面的ではなく、その被害者が比較的限定されているということが（もちろん将来、ジェノサイドとしての公害に発展しないという保障は何もないが）、加害者としてのわれわれの性格をより鮮明化する。つまりこの日本で物的豊饒に酔っているわれわれ大多数（労働者階級も含めて）の存在には、公害病に苦しむ人々や、生活基盤を収奪されて最下層の都市労働者に転落していく第一次産業従事者、そしてさらに東南アジアでの日本独占資本による自然収奪や、現地の人々に対する労働収奪、等々が、その前提となっている。現在、公害企業として日本国内で追いつめられているものが、沖縄、あるいは韓国、台湾、そして東南アジアへと疎開し

ているという事実はその一つの例証となる。

いまわれわれが、公害・自然破壊を阻止するために立ち上がるためには、われわれの内なる価値観を「何のための文明か?」「人間にとって真に大切なものは何か?」といった根源にまで立ち戻って把えかえすことが必要とされる。六八年―七〇年とつづいた大学闘争、そして最近の公害・自然破壊をめぐる立ち上がった広範な労働者、農民、漁民、そして市民の闘いとは、まさしくその萌芽としての意味を持っている。

価値観のへ転換Vを提起 する三里塚斗争

自己の生命をかけてまでも斗いつづけられている三里塚の農民の闘いを、少しばかり考えてみよう。

ここでは、農民の生活の糧である土地をまさに不当にも奪っていく国家―地方自治体はつねに機動隊に守られ、土地をまさに正当にも守ろうとしている農民は、皮肉にも自らの所有物である土地が原因で、本来私有財産を守るべき権力によって違法な存在におとしめられている。この「逆説」こそ、現代社会を象徴している。ところで農民たちの土地への執念は、一体何によるの

だろうか。農民たちが、自分の土地を守ることを正当とし、それを奪うものを不当とした根拠とは一体何なのだろうか。それは斗争の初期においては、ほかでもない自分たちの土地を守るといいういゆる「地域エゴイズム」であったかもしれない。しかし長い斗争の過程からその根拠として、しいにより普遍的なものを獲得していったというところを、われわれは認めないわけにはいかない。すなわち彼らは現在、三里塚に空港ができることに反対しているのではなく、空港ができることそのものに反対しているのではないだろうか。

大空港建設の必要性は、航空輸送の「合理化」にあった。輸送をより高速化・大量化することによって、航空資本はより合理的に利潤を獲得することができるからだ。この空港ができれば、発着する飛行機の便数を増やしたり、超大型機を就航させたりすることが可能になる。これによって、飛行機の利用者である国民の側もより一層の「便利さ・快適さ」を味わえるようになる。

しかし実際には、このような「便利さ」に浴するのは必ずしもすべての国民ではない。空港建設に「協力したり」はずの三里塚の農民でさえ、この空港から飛行機に乗ることとはほとんどあるまい。国民の誰もがこ

の「便利さ」を必要としているのではないからであり、たとえ必要としていても、それはできないという経済的なへ不平等Vがあるからだ。さらに、この「便利さ」にはつねに大型機による騒音・大気汚染、そして、いったん事故が起こればたちまち大量殺人という、極めて非人間的な「陰」がつきまといっている。

さらに問題にされなくてはならないことは、この空港がへ農地Vをつぶして建設されるということだ。農業をもうからないものとして基本的には切り捨て、そこから得られる土地や労働力を、より能率的に富を生み出すものとしての独占資本の従属下におこうとするのが、現在の日本(帝国主義)の「農業」政策だ。三里塚の空港建設は、このような農業解体政策の具体的なあらわれのひとつともいえる。

「大空港建設」は独占資本が、より一層の利潤を追求するために不可欠なものである。それが、われわれ国民にもたらす恩恵は、せいぜいつかの間の快適さ、便利さでしかない。しかもその「恩恵」の配分ですら、必ずしもすべての人々に対してではない。それにもかかわらず、それは公害、土地収奪、そして農業の崩壊(これは自然との一体化をはからねば成立し得ない人間)のいとなみが失なわれていくことを意味す

る)という不条理を不可避的にもたらし、多数の人間の生活を圧迫する。「空港建設」がこのようなものでしかないならば、それは果たして人間にとって、ほんとにへ進歩Vでありうるのだろうか。資本から、おこぼれとしてもらい受ける「快適さ」を代償として、われわれは人間として大事なものを不覚にも失なおうとしているのではないのか。

この根源的なへ問いVこそがいまや三里塚の農民のへ土Vに対する執念の支えとなっていると思われるのだ。農民の怒りは、国土と人間の生存が国家―資本の利益のままに翻弄されていくことに対する怒りであり、そして「社会の進歩」を信じ込み、農民たちの抵抗をエゴイズムとして冷やかに眺め、みせかけの物質的豊饒さに酔っている、われわれ大多数の国民に対する怒りでもあった。あくまでも代替地や補償金を受けとることを拒否しつづける農民たちの中には、自らの人間性はたとえ金銭をつまっても手離しはしないという強靱な人間の魂がある。同様の姿を、チソンの社長に土下座を要求し、あくまでも企業責任を追求する水俣病患者の中にもみることができ。彼らと、金銭の代償という交渉の舞台でのみ話し合うことは、彼らを殺しつづけることだ。

科学は何をしてきて 何をなしているのか

ここで告発の対象とされようとしている現代物質文明の基盤を、具体的に作りあげてきたのは、進歩した科学技術だ。物質文明の進歩、すなわち生産力のより一層の

発展が、人間を物質的に豊かにし、それこそが人間の幸福を保障するという現代の価値観が、同時に人科学Vの進歩に対する無限の信頼感を呼びおこしているのは当然といえる。それでは、現代物質文明が不可避免的につくり出した公害・自然破壊に対し、現代の科学技術はどのように関わっているのであるか。また、実際に科学技術をおし進めている科学者・技術者といわれる人々は、どのようにこの状況に対応しているのだろうか。それへの解答は、すでに理念的あるいは間接的にはあったが、人科学斗争Vとしてわれわれに提起されている。

「公害とか自然破壊は、科学技術の進歩が不完全であるために生じるのであり、科学技術がより一層の進歩をとげれば問題はやがて解決される」という意見は、現代に特徴的な考え方もれない。しかし、この種のオプティミズムは極めて的はずれであり、むしろ危険な考え方といわなければ

ならない。たしかに、公害や自然破壊がともなく発生せざるを得ない原因は、現代の科学技術のある種の不完全さに求められる。しかし問題は、その不完全さとは一体何を指すのか、ということだ。

現代の科学技術の不完全さとは、研究者の怠慢により、その進歩が未熟であることとか、学界の前近代性や国家権力の不当な干渉により、進歩が抑制されたり、悪用されたりすることなどを意味するのでは、決してない(たとえ事実としてこれらの事態があったとしても、それは研究者、学界そして国家の自己矛盾であるにすぎない)。公害・自然破壊を招かざるを得ない科学技術の不完全さとは、近代科学に内在する論理、つまり近代科学が近代科学として成立する前提条件・根拠そのものの中に見い出さなくてはならない。本来そうなるはずのないものが、なんらかの外力により歪められた結果そうなったのではなく、それは生まれついたとき以来、自らそうなるしかなくかつたのである。なぜかというところ、近代科学の論理は、公害・自然破壊を招かざるを得ない資本の論理と、じつは同一の基盤の上に成立しているからである。

科学的認識とは『モノ自体の分割可能性とその集積によってモノ自体がモデル的に再構成されること、および個別的の局面での

数量化の可能性を前提とし、そこに客観性(保障をおいている(湯浅敏史「技術史研究」47号)』。一方、最大限の利潤追求を至上命令とする資本は、より合理的な生産活動を遂行しなければならない。そのため、所与の条件下での、ある特定の事物の、当面する生産活動に関連のある属性についての、客観的法則の把握を必要とする。その際、対象とする事物をより合理的に操作可能とするため、情報はすべて数量化しなければならぬ。こうした問題設定に対し、最も有効な解決手段となるのが、上述した性格をもつ近代科学的な認識方法そのものだった。このように、近代科学と資本とは原理的には同じ論理構造の上に成立しているのである。

現在、認識作業としての近代科学は、対象物をより細分化し、分断化することによって進歩し、その結果、対象物の全体像を喪失していく。一方、実践作業としての資本制の生産は、個別局面における生産性をより合理化していくことによって発展し、その結果、全体としては公害・自然破壊を発生させていく。この二つの現象は、それぞれ必然の成りゆきであって、しかも互いに相互媒介的に作用しあっている。

このような近代科学や資本制の生産のもつ矛盾が、現在われわれに示しているのは、

対象とする個別的の局面においては極めて合理的かつ正当な営為であっても、その集積である全体は極めて不合理で、かつ不当なものであるという事実だ。近代という資本制社会にすむわれわれは、実践においても認識においても人自然Vを分断化することによって疎外し、その結果人間自らを疎外しているのである。

上述のオプティミストの主張どおり、もし近代科学がその論理を貫徹させて進歩すればするほど、その開発する自然力(生産力)を巨大化させることができるが、一方ではそれに応じて、ますます深刻な予測され得ない事態を招かざるを得ないのだ。その結果は、おそらく公害・自然破壊のより一層の多様化、巨大化でしかないだろう。

専門家としての科学者・技術者が出現したのは、じつに資本制の生産様式が確立された時期であったということを、われわれは歴史的事実として忘れてはなるまい。近代科学とは資本制社会に特有な、人間の理性の一形態にすぎない。近代科学は人々を迷信や神話から解放し、飛躍的な物質的豊かさを与え現代の物質文明をつくりあげた。しかし一方でそれは、人間一人一人の運命までも予測・計画・制御していく高度な管理社会を生み出し、さらに人間から労働の喜びを奪っていく労働システムの合理

化、人類を破局に導く核戦争の危機、そして人間の健康をむしばむ公害・自然の荒廃という、人間の新しい疎外形態を生み出した。これらはすべて、近代科学が必然的に生み出したものであるがゆえに、近代科学の力により解決することはでき得ないのだ。

二十世紀後半の現在、すでに近代科学的な認識方法は資本制的生産様式とともに、その歴史における使命を終えたというべきである。そうであるならば、われわれは、人間の疎外・自然の疎外を克服するつぎの時代を創り出すべき新しい知的営為（学問）を獲得していかなければならないのではないか。

自然「保護」運動から

自然「奪還」斗争へ

ここで、公害・自然破壊を阻止するためにはわれわれはいかにすべきかを述べなければならぬが、その前にいままで述べてきたことを、もう一度整理しておこう。

近代という資本制社会においては、われわれは、単に「実践」生産においてだけでなく、「認識」そして「価値観」においても、自然を疎外している。しかもそれぞれの局面においてそうなるのは、ほかのものと同様にそうなるのではけしてな

く、相互規定的・相互媒介的にある（△存在が△意識を規定するの、あるいはその逆か、といった二者択一をせざる教条的な議論は不毛なものだ）。だから公害・自然破壊を生み出した原因を、資本制的生産様式にあるとするのは、そのこと自体まちがいではないとしても、それからすぐ解決方法として、「私的所有制の廃絶」のみを言うことは不十分である。制度の上では、ブルジョワジーの存在が否定されているはずの、現在のソ連や東欧の「共産主義」国家においても、公害の問題は未解決である、という事実を見落としてはならない（この意味で、ソ連・東欧諸国と異質の革命の道を歩む中国の存在はわれわれに多くのことを教えている）。

同じように、人間の意識やモラル、そして認識の不完全さのみに公害・自然破壊の原因を求め、人間のモラル向上や科学技術のより一層の進歩が解決をもたらすと考へることも誤りだ。相互規定的な諸要因からなる△全体△の動向を、単なる一つの要因の性質で説明、あるいは操作しようとしても不可能なことだ。公害・自然破壊を生み出すものは、正確には、△実践・認識・価値観が相互規定的に複合された総体、つまり△近代△そのものということになる。

以上のように問題を捉えて、公害・自然破壊を阻止する闘いとはいかなるものかをイメージしてみよう。それは一口でいうならば、総体としての△近代△を總体的に超克していくものといえよう。それを私は、かりに△自然奪還斗争△と呼ぶことにする。現在、△実践・認識・価値観△のすべ

てにおいて自然を疎外している（すなわち自然から疎外されている）われわれには、最初から守るべき自然はないのであり、このことを認めることから出発せざるを得ない。だから、われわれは自然の△保護△をめざすのではなく、めざすのは自然の△奪還△である。奪還とは、人間と自然との結合の全体性を獲得することを意味する。つまり自然を疎外しない、それゆえに、人間自らを疎外することのない、人間と自然との新しい関係を、△実践・認識・価値観△において創りあげていくことだ。だから自然奪還斗争は、人間奪還斗争でもある。

闘いの対象となるのは、単に制度としての私的所有制だけではない。現在のわれわれが、自然と結合することを妨げているものもろもの、つまり、近代科学技術や、われわれ自身の意識・価値観にまで奥深く浸透している△近代△をも、闘いの対象としなければならない。この意味でこの闘い

は、△反権力斗争△でもあるし、△文化革命△、あるいは△人間革命△でもある。これらの三つの闘いの質を同時に意識的にめざしていかなければ、われわれには自然は獲得できない。

われわれは、現在各地で進行しつつある様々の具体的・個別的な公害・自然破壊を告発・阻止していかなければならない。そしてさらに、三里塚の空港建設に象徴されるような、日本列島総体を資本の利益にのみ従属させていく、国家（＝資本）による国土の（帝国主義的）再編を阻止していかなければならない。われわれは直面する個別的・具体的事例の中で、そこにおいて語られる「公共の福祉・社会の進歩」という大義名分のもつ幻想性を、具体的に暴露していくであろう。

さらに、自然収奪と公害を生み出す根源としての、資本制的生産様式そのものの変革を追求していかなければならない。生産の過程や生産物そのものが公害・自然破壊を招かざるを得ないのは、生産物が商品として利潤追求の手段となっていることから生ずる。だから公害・自然破壊を阻止するためには、生産物をあくまで商品化していかうとするブルジョワジーをしりぞけ、生産の管理権、すなわち自然の管理権をわれわれ自身の手へと奪還していかなければなら

らない。私的所有制の廃絶は、公害・自然破壊を阻止するためのひとつの必要条件として展望される。

一方でわれわれは、現代の資本制的生産・物質文明を支えている、近代科学技術の止揚（否定ではない）をめざす。既成の科学技術は、個別における合理性を追求していった結果、 \wedge 全体性 \vee を喪失していったのがその特徴であった。この全体性の喪失とは、単に、認識（科学）において、全体としての自然を見失っていったことを意味するばかりでなく、実践（技術）において、人間に対する認識（人間観・価値観）の導入を無視していたために、 \wedge 自然と人間との結合 \vee の全体性を欠如させていったことを意味する。われわれの必要とする新しい科学技術とは、 \wedge 部分 \vee における合理性よりも \wedge 全体 \vee における合理性を追求したものでなければならない。

既成の科学技術の止揚とは一口でいうならば \wedge 全体性 \vee の回復ということだ。認識の対象として対峙する自然は、実験室に近づかうのよいように持ち込まれた操作化・分断化された「自然」であってはならず、あくまでも具体的な、全体としての自然でなければならぬ。われわれは認識者として、総体としての自然に対する総体的な結合をめざす。さらに、われわれが創り出す

べき生産技術は、生産の過程において、そして生産物そのものが、自然・人間を疎外しないことを可能にするものでなければならぬが、そのためには、総体としての自然に対する認識（自然観）を必要とするばかりでなく、人間に対する認識（人間観・価値観）をも意識的に導入して、それら有機的に結合させたものでなければならぬ。

このような新しい科学技術創出のための作業は、具体的な \wedge 情況 \vee から隔絶したところでなされる「思索」だけでは不十分だ。それは、前に述べたような公害・自然破壊に対する個別的な闘い、具体的な生産実践、具体的な自然との関わり、そして「既成のもの」をあくまでも再生産していくこととする、科学者・技術者に対するイデオロギー斗争、等々の、様々の領域における広範な人々の創意工夫により、徐々に把みとられていくものであるにちがいない。

このような意味で、われわれの創り出すべき科学技術は、 \wedge 民衆の知恵・創意工夫の体系 \vee として成立すべきものといつてよい（一方、近代科学技術は民衆の知恵を抑圧し、科学者・技術者と呼ばれる特権者が「学問の自由」を排他的・独占的に享受することに成り立っている）。

現在、さまざまな土着の技法が民間に伝

承されているが、これらは民衆自らがつくり出した「技術体系」と考えることができ。これらは現実には、現在の \wedge 正統 \vee たる近代科学技術の陣営より、一方的に、非科学的ということを理由に（不当にも）迷信あつかいされ、窒息しかけている。しかし \wedge 異端 \vee であるからこそ、これらの技法は、近代科学技術の閉塞状況をのりこえうる質を含んでいると考えられる。現在、医学や農業技術は、それぞれ薬公害や臓器移植、そして農薬公害などで、その近代科学技術としての限界性をはっきりと露呈させつつある。とくにこれらの分野において、

その諸矛盾を止揚するために、民間に存在する土着の医療技術や農法を正当に評価し復権させていくことが、ひとつの重要な作業になるのではないかと思われる。最終的には、このような民衆の模々の試みと、先に述べた私的所有制の廃絶という客観的構造の変革とが相補的に作用し合って、われわれが必要とする新しい科学技術の体系ができあがっていくのであろう。

以上のような種々の実践（闘い）はつねに、「人間にとって最も大切なものは何か」という人間の根源を探る視点を持たなければ、展開し得ない。 \wedge 人間観 \parallel 価値観 \vee の模索が \wedge 闘い \vee をより豊かにし、そしてこのことが、価値観自身をよりリアルなものにしていく。このようにしてわれわれは \wedge 意識 \vee の上でも \wedge 存在 \vee の上でも、自然との間に全く新しい関係を創りあげていくのであろう。

既成自然保護運動の限界

ここで既成の自然保護運動の限界を明らかにしなければならぬ。まず、なによりもそれは「公共の福祉・社会の進歩」という幻想を突破できる運動ではなかった。「自然保護も一つの社会の要請である。それゆえ、他の社会の要請との調和を図る必要がある」という自然保護論者の議論は、自然保護運動が、上述の資本による自然取奪に対し無知であったために基本的には資本に屈服し、つねに \wedge 条件斗争 \vee に矮小化していかなざるを得なかったことを象徴している。

だから当然にも、既成の価値観、現代の科学技術、あるいは現代文明そのものをトータルに把えかえし、新たなものを模索していくという視点が欠如していった。つまり、いたずらに自然「保護」を主張するだけで、積極的に自然をわれわれの手に取り戻していくという \wedge 奪還 \vee の思想が全く欠如していた。

熱心な自然保護論者の中に、数少なくない大学教官がいるという。しかしながら彼

らも、他の大多数の教官と同様に、自己保身的にあの大学斗争を見殺しにしていっただとするならば、それはまことに不幸なことであった。しかしそれは、彼らの荷なってきた自然保護運動の質を考えたとき、当然なことでもあった。いまこそ再度、彼らのそうした存在を問わねばならない。

管理された「人間」と管理された「自然」——何のため の自然奪還か

さて、すでに述べたように、現代社会においては△自然▽は全面的にブルジョワジの管理下に置かれていくわけだが、このような状況下で自然はわれわれ——とくに都市生活者——に対していかなる役割を持たされているのであろうか。

都市部における人間の生活は都市公害による△光・水・空気・緑▽の喪失で、ますます脅かされていく。一方、労働の過程においては、人々は目的合理性の貫徹したシステムの中心とり込まれて部品化されていく。もはや△生活▽の欲び、創り生み出すものとしての△労働▽の欲びは、極度に剥奪されてしまっている。こうした覆うべくもない矛盾の激化に対し、国家（＝資本）は人々の目をそれからそらし、慰撫しようとして、様々の策を弄する。

そのもつとも基本的なものとして、すでに述べたように、資本はある程度の労働賃金を保障することにより、人々の物欲をくすぐる（現在の労働組合は、労働者の生活の質、労働の質そのものを問題にしていくとせず、ひたすら賃上げを要求していくのみである。このことは彼らの主観的意図はどうあれ、人間性を金銭で買い占めていく現体制の論理を補完する）。ここではその策の一例として、ある特定の地域に一定の「自然」を残存させておいて、人々を積極的にそこへ△動員▽していこうとする企てを挙げておこう。

人々は都市における日々の生活と労働に疲れ、また自然に飢えている。そのためこれを少しでもいやそうと易々と△動員▽に乗せられていく。この都市から郊外への、そしてその逆向きの△大量動員▽は現在の進歩した輸送機関やレジャー産業が受け持つ。本来、旅というものは個人の、自由でのびのびとしたものであったはずだ。しかし現在では、それは大量生産方式による規格化された「観光旅行」へと変質してしまつた。この過程においても、人々は資本に操作され市場化され奪奪されていくのだ（三里塚の空港建設も、こうした航空資本のねらいによることはすでに述べた。

また、最近頻発する航空機事故による大

量殺人は、この過程における最も激しい人間の奪奪の形態といふことができる。この種の事故を防ぐために、単に空域での「軍事」に対する「民間」の優先をいうだけでは不十分である。問題にされなくてはならないのは、「民間」と呼ばれる航空資本そのものだ。こうして郊外の「自然」に連れてこられた人々は命の洗たくをする（させられる）。しかしながら実際は、観光開発と称して、そこに乗り込んで来ている観光資本にガッチリと奪奪されていかざるを得ない。こうして△郊外の大自然の中で労働意欲を回復した△彼らは再び都市の真只中に連れ戻されていく。そこでは△モーレツ人間△としての生活が彼らを待ちうけている。このようにして一つの△回路▽が完結する。

この回路の持つ意味は単に、矛盾を隠蔽し、人々を慰撫するという機能を果たすだけではなく、人々から自然を一方的に奪って、利益を独占し、さらに自然に飢えた人々に自然を商品化して売るといふ、資本による二重の奪奪を可能にしている。このように現在においては、△自然▽は資本によって仕組まれた△回路▽の中に組み込まれてしか存在し得ない。

このような関係は、具体的には最近△自然公園▽の役割の変質として論じられてい

る。かつての自然公園は、景観が国土を代表するとか、学術研究、教育上貴重であるといった意味を持たされていた。しかしながら最近では、さらに積極的な意味として△都市生活に疲れた市民の緑の保養地△としての役割を付与されようとしている。私は決して自然公園そのものを否定するつもりはないし、その積極的保護の必要性も認める。しかしながら問題はそれだけではなく、現在では「自然（公園）」は上記の△回路▽の中に組み込まれることなしにその存在は許されず、自然公園の存在は同時にほかの領域における不断の自然奪奪と、それによる人間疎外を不可分に伴っていることこそ問題なのだ。

観光地や自然公園での△心ない△観光客による自然破壊（たとえば、草花を持ち去ったり樹木を折ったり）に対し憤りを感じ、その解決として単純に観光客のモラル向上を求める自然保護論者が多い。しかしながら上述したように、自らの生活の場、労働の場より一方的に自然を奪われていった人々が、やっと旅先で見つけることのできた草木をむしりとりる姿を見て、単に彼らのモラルの頽廃を嘆く前に、そこまで人々を追いつめていった現代社会の抑圧的構造こそを、見てとるべきではないのか（上記の主張をなおもくり返す人は、何のために

自然を保護するかを根底的に把え直すべきだ。われわれが自然奪還を主張するのは自然のためにではない。

こうした関係を理解し得ず、単に自然公園の「自然」を守ることを自己目的化しているならば、国家(資本)の「大自然の中で人間回復を」という欺瞞的なキャンペーンを補完し、人間の生活の場、労働の場における自然のより一層の収奪を阻止し得ず、永久に人間をその疎外から脱出させることを不可能にしてしまう。

われわれは不当にも非人間的労働、非人間的生活を強いられて、その代償としてしか与えられることのない「ささやかな自然」を拒否する。われわれはまさに、自然の中で労働し、自然とともに生活するという人間本来の生きる喜びを得んがために、自然を保護、いや奪還するのではなくてはならない。

△主体創造Vとしての自然保護教育を

最後に、すでに述べてきたことのくり返しともなるが、自然保護教育について簡単に述べてみたい。

現在、様々の教育機関において、自然保護教育の必要性が叫ばれているが、それらの実体は、「何々してはならぬ」といった

自然保護のモラルや、抽象化された自然科学的知識などを教えようとするものだ。あたかも、現在の状況を招いたのは、個人のモラルや科学的知識の不足のみにあるかのように。しかし、たとえ個人がモラルとして自然を守ることが大事だと知っていたとしても、またたとえ、科学的知識として大自然のメカニズムを知っていたとしても(現在の自然科学の状態ではこれを満足させることすらでき得ないということはずに述べた)、それだけでは自然の収奪・破壊の進行は阻止し得ない。公害・自然破壊というものが、単なる△自然V現象ではなく、△人間的(社会的)V現象であり、さらに、すこぶる△現代的V現象である、ということをごくり返すことは重要だと思われる。

このことを忘れて出発した自然保護教育は、現実との緊張関係を失って、抽象的・観念的なものになってしまえばかりでなく、人々に△幻想Vを与える危険なものに落ち入ってしまう。自然保護教育そのものは、それ自身ではならぬ問題の解決になり得ないということ、はつきりと確認しておこう。われわれが現在、教育に期待できることは、「何がどのように問題なのか」を、現実の△実践・認識・価値観Vにわたって、多くの人々に問題提起することであ

り、そうすることによって、問題の真の解決方法を自から探りうる主体を創造することにある。

大学などにおいては、自然保護教育の設定は同時に△自然保護学Vのそれと重なっている。自然保護学は、公害・自然破壊を防止するための有効な武器として期待されている。しかしながら、すでに述べたように、公害・自然破壊を阻止する方法は、われわれのイメージした様々の試行錯誤を伴う△斗いVしかあり得ず、それを単に△科学技術Vに求めるというのは、科学技術そのものを既成の概念から脱出させぬ限り、極めて的はずれの発想だということをおこそう。もし、自然保護学という学問が設定されうとするならば、それは上記の△斗いVそのものとしてであろう。

おわりに

△自然Vと△人間Vとを分断化して、それぞれを個別的、抽象的に語ることはできない。この小論で私が考察してきたことは、△人間と自然との関係Vについてであった。『環境がなければ生物は住めないが、生物がなければ環境の概念もないし、それを合わせた自然もない。このとき自然は生物的自然になった。時がたつて、超優越生物としての人間が誕生し、自然は人間的自

然になった。したがって自然保護が人間の手のまったくはいらぬものの保存に目的を置くなら、それは実現不可能であり、理屈も通らない。必要な自然保護とは、じつに人間的自然的保護である。(川那部浩哉・朝日ジャーナル・一九七〇年七月二十六日号・三四頁)。この△人間的自然的Vの自覚のうえにたつた△人間と自然との新しい関係Vの獲得こそが、自然保護運動にとって最も重要な運動課題になるであろう。

—一九七一年・九・三〇—

(付記 一九六九年春から現在にいたる大学とそれをとりまく状況の中で、折りにふれつづけられた、数少なくない友人との討論が、私のこの小論作成の背景となった。このささやかな文章は、私自身の今後の実践のひとつの基本になると同時に、これを彼らに捧げることにより、彼らへの一層の連帯の証しともしたいと思う)

(北大農学部大学院・博士課程学生)